

Ⅲ 太陽と誕生の神話

○

曆の最後の五日間は太陽の力が弱まる。この期間は非常に不安定で災いが起こりやすいため、神官たちはその前日に生贄の儀式を執り行う。五日間を安全に暮らし、無事に新年を迎えられるよう、太陽神コルイックに祈るのだ。生贄は神官の子供から選出され、その心臓がコルイックに捧げられる。そして無事に新年を迎えられた暁には、大神官の子供の心臓が、感謝の印として改めて太陽神に捧げられることになっている。

『祭儀書』二十七ページより抜粋

○

太陽神殿には、私以外誰もいなかった。

この神殿は、元々すべての儀式が執り行われる場所で、毎日大勢の人で賑わっていた。が、やがて目的ごとに小神殿に分けられることになり、そういった小神殿が集まる神殿群がここから離れた別の場所に造られたため、今は太陽神殿に人が来ることは滅多にない。

私は古ぼけた石段に腰かけ、赤紫から濃紺へと変わっていく空を眺めていた。

明日から始まる「不吉な五日間」のため、人々は家にこもり、神官たちは神殿群で儀式の準備をしている。もうそろそろ開始する頃だろう。

無事に新年を迎えることができれば、私、ケツアルは、ここでコルイックへの生贄となることになっている。父が大神官となったとき、私はこの事実には歓喜した。神官の娘として生まれた以上、一般庶民と違い、特別な場での生贄となることは分かっていたが、まさか新年というめでたい日に当たるとは思いもよらなかったのだ。それからというもの、私は太陽神殿で新年に思いをはせる毎日だった。

やがてトカトカトカ……という太鼓の音と、かすかな人の声が聞こえてきた。儀式が始まったのだ。歌うようにして唱えているのは神の言葉なのだと、前に父に教わった。私は指で太鼓のリズムをとりながら、いつもと同じく新年のことを考えていた。空はすでに無数の星々で埋め尽くされている。何の気なしに森の方を見やると、不思議な動きをする星が見えた。

「あれ……？」

最初は流れ星かと思った。しかしそれは流れては行かず、空を不規則に動き回っていた。なんだか不気味だ。

「まあ、いいか」

しばらく見つめていても動きは止まらず、かといってそれ以上の動きを見せないの、私は再び儀式の声に耳をすませた。太鼓と声は徐々に速く激しくなる。神殿内の熱気がここまで伝わってくる。クライマックスには太鼓が大きく一打ちされ、生贄の心臓がえぐりだされて

祭壇に置かれることになっている。その時はすぐそこまで迫っていた。

ドコドコドコドドドド……

星が一つ流れるのが視界の端に映った。その瞬間、私はふと嫌なものを感じた。

ドオオオオオ——ン！

太鼓にしては大きすぎる音があたりに響き渡り、目の前の森が吹き飛んだ。

「うああっ!？」

視界がいきなり反転した。石段から投げ出されたのだ。地面に叩きつけられると同時に、すぐ近くに大量の木片が落ちてきた。強い衝撃で太陽神殿の柱が折れ、壁がバラバラと剥がれおちていく。それらを避けるのに必死で、地震が起きていることに気付かなかった私は、再び投げ出され、大量の木と石の上に落下した。

「イタタタ……ああっ神殿がっ!」

痛む体を無理に立たせると、そこには見るも無惨に崩れ落ちた「元・神殿」があった。私はかろうじて残っていた階段の残骸の上に立ち、すでに砕けてしまった祭壇を見つめた。顔が青ざめていくのを感じた。今日から新年まで五日間で神殿を新しく建てることは不可能だろう。新年の生贄の儀式はこの神殿で行うものと決まっている。もしできなかつたら、コルイック神はどのような災いをもたらすか……。

「ケツアル!大丈夫か!」

十数人の神官を従えた父が走ってくるのが見えた。皆、崩れ落ちた神殿を見て絶句している。

「わ、私は大丈夫だけど、神殿が……」

父は黙って首を横に振ると、まわりを見回した。

「大きな音が聞こえた瞬間、なにか人ではないような恐ろしい叫び声が聞こえた。何か見なかったか?」

逃げるのに必死だった私は、叫び声を聞き取る余裕などなかった。何かがいるとしたら、吹き飛んだ森のあたりだろうか。そう告げると、神官が数人、緑の消えた森の跡に向かった。しばらくして彼らは不安そうな顔で戻ってきた。

「どうした。何かいたのか?」

「いいえ、しかし……」

「あの谷の向こう側かもしれないぞ」

父は森の跡にある谷を指差した。しかし先程の神官は「違うんです、あの……」と少し震えた声で言う。その時、私は彼の言いたいことを理解した。

「父さん、この森に谷なんてなかったよ」

この森は私が幼い頃からの友人達との遊び場だったが、谷など見たことがない。

「とすると、先程の地震で地割れしたのか……?」

私達はその「谷」へと向かった。

「谷」は底が見えないほど深く、また向こう側への距離も相当なものだった。

「……ケツアル、ここは私達が調べる。お前は家に帰っておけ」

私は「谷」に言い知れぬ恐怖を感じていたため、後ろも振り返らずその場を離れた。家に帰りつくと、私はまず屋根の上に登った。家は先ほどの場所よりも高い位置にあるので、森が一望できる。そして先ほど自分がいたところを目にした時、私は思わず息をのんだ。

それは谷などではなく、ぽっかりと空いた巨大な縦穴であった。

翌日、朝早くから父から呼び出され、私は再びあの場所へと向かった。「不吉な五日間」が始まったため国民たちが外を出歩くはずはないのに、逆にすべての人が出歩いているのではないかというほど辺りは人でごったがえしていた。皆、昨夜起こったことを確かめに来たのだろうか。それにしても数が多すぎる。

すでに瓦礫の山となった太陽神殿を横目に穴へ向かうと、父は神官たちと話をしている最中だった。服装から、昨夜からずっとここにいたのだと分かる。

「父さん、何？」

声をかけると、父は寝不足を感じさせない顔で小さく微笑むと、周りの神官たちを払った。

「ケツアル、待っていたぞ。さて、何から話すべきか……」

父は腕を組み、穴のほうを見やった。

「これは谷ではなく穴だった。何かが森に落下し、そのせいで深い穴があき、地震が起きたらしい」

「その何かって？ 調べたんでしょ？」

問うと、父は今までにないほど厳しい顔をした。何度か言いかけてはやめ、ようやく決心がついたのか、一つうなずくと口を開いた。

「いいか、落下してきた何かとは……神だ」

太陽神コルイックとトウモロコシの神カニール、この二神が落下してきて、今もこの穴の底にいる。周りではがやがやと話している人々の声が急に遠のいていくのを感じた。その知らせはあまりにも衝撃的で、正常に理解するのにしばらく時間がかかった。神が……儀式のときでさえ風や火の動きでその存在を示すだけで、人前に姿を現すことのなかった神が、すぐ近くにいるというのか。

「本当に……？」

「ああ。そこでお前を呼んだのだ。実は、昨夜の生贄の儀式は心臓を取る前に中止となった。倒れる柱の下敷きになって生贄が死んでしまったんだ。しかし本物の神が現れてしまった。……私たちは、お前に生贄となってほしいと考えている」

一気に、周りの声が耳に戻ってきた。がやがやとうるさい。

「えっそれって、今から？」

あまりに唐突すぎるその言葉に、私は慌てた。

「それは十分名誉なことだけど、新年は？ 私以外、あの役はできないわ！ 大神官の子供がやるって決まってるのよ！」

思わず大声を上げる私を父は手で制した。

「どうせこの状態じゃ、新年の儀式は神殿郡にある仮の神殿で行われることになる。大神官

の娘がそのような不名誉なことはできない」

どこか言い訳めいている気がして、私は少し腹が立ってきた。

「王族は？彼らなら一国をまとめるものとして十分ふさわしいわ」

「王族は、本物の神が現れたと聞いて、恐れあまり宮殿にこもって出てこない。いいかげんにしてくれ。コルイックが地上に落ちてきたという不吉な出来事の後、無事に新年を迎えられるかもわからないんだぞ！」

珍しい父の剣幕に、私はしぶしぶではあるが今日生贄となることを了承した。

穴の端には大きな縄梯子が付けられていた。神自らが手を下すだろうという判断で、私は一人で下に降りる。日もすっかり昇っているというのに、底に近づくにつれて、夜のような闇が広がっていく。しかし底には神官たちが置いたのか、たいまつが側面に設置されており、明るさは確保できていた。縄梯子を降り切ると、中央に人のシルエットを見つける。

「……」

少し違和感があったが、すぐにその正体が分かった。確かカニール神は人と同じ姿だが、コルイック神は炎に包まれた巨大なトカゲの姿をしていたはずなのだ。壁画や絵文書などにそう描かれていたのを思い出した。一瞬偽物かとも思ったが、それならば大神官が気付かないはずがない。すぐに思い直す。

恐る恐る二神に近づいていく。向こうは私に気づくと、じっくりと観察するように見つめてきた。突き刺さるような視線が痛い。

「お前は、大神官の娘か」

片方に尋ねられた。どちらがコルイックか考えあぐねていると、

「ケツアルか」

ともう片方にせかすように尋ねられる。

「はい」

慌てて返事をする、最初に口を開いた方が一歩前に出た。

「我は、太陽神コルイックである」

そう言われると、確かに尊厳さが感じられる。

「そして私がトウモロコシ及び作物の神、カニール」

少し丁寧に自己紹介をした彼は、トウモロコシの葉をモチーフとした装飾品をあちこちに付けている。

「あの、生贄のケツアルです。よろしくお願ひします」

神を目の前にして（本物かどうか少し疑問は残るが）何と言えよいかよく分らず、下手な自己紹介になってしまった。緊張しながらコルイックの前に立つと、彼はため息をつき、予想外の返答をした。

「残念だが、断る」

……なんと。断られた。

「もう少し付け加えよう。今は受け取れない。お前の父上にも説明はしたのだがな……」

コルイックは不機嫌そうな顔を見ると、カニールの肩を叩いた。

「全て話してやれ。私は話したくない」

カニールは苦笑すると口を開いた。

「まず、気になっているだろうね。大トカゲのはずのコルイックが人間の姿をしていること。今から話すのは、そのことについてだ」

「不吉な五日間」。その間は太陽の、ひいては太陽神コルイックの力が弱まる。そのためその期間は、安全のため、自身が祭られている神殿で過ごすことになっていた。今年の場合は君の国のものだ。え？もちろんトカゲの姿でだ。

そうして昨日、コルイックは神殿へと向かっていた。ところが、途中で蝙蝠たちの襲撃にあったのだ。

「蝙蝠……？」

あまりにも数が多すぎるので、通りがかった私も退治に加わっていたのだが、しばらくすると何十羽もいた蝙蝠が急に消えてしまった。そこで油断したのがまずかった。不穏な気配に振り返ると、そこには真っ黒な布をまとった何者かが大ガマを振り上げているところだったのだ。とっさに避けようとしたが、すでにその刃はコルイックの尾を真二つに切り裂いていた。コルイックは力のある神なので、とっさに人間の姿に変身した。人間には尾がなく、変身すると傷が消えるからね。しかし尾を失うことには変わらない。その瞬間、コルイックは神の力を失い、空にとどまることが不可能となり、私もろとも地面に落下した、というわけだ。尾はそのまま盗られてしまった。

「じゃあ、昨夜見た流れ星みたいなものは、あなた方だったのですか……」

その時は何も気にしていなかったが、そんな大変なことが起こっていたとは。

「あ、神の力を失ったので、生贄を受け取れないのですね」

すると今まで黙っていたコルイックが、足元の石を思い切りけった。

「太陽神の力を含む私の尾を使うと、そこいらの神よりも強力な力を得ることになる。下手をすれば、新たな支配者となることも可能なのだ！」

「誰が尾を奪ったのか分かっているのですか？」

尋ねると、コルイックは陰しい表情でうなずいた。

「夜の神、エク・アカバル」

その名前には非常に聞き覚えがあった。無数の吸血蝙蝠を従え、夜の闇に行く恐ろしい存在——私が見た絵文書にはそう描写されていた。

「奴は神としての任務を果たさず、気の向くままに力と生贄を求め悪行を重ねたため、一度我が焼き払ったはずなのだ」

それがいつの間にか復活していたとは、どういうことだろう。

「そこで初めの話に戻る。昨夜の儀式での生贄はもうよい。しかし、尾を取り返すのに協力してくれ。成功した暁には、新年の儀式でお前を今までにない最高の生贄として受け取ろう」思わぬ言葉に、私は気分が高揚するのを感じた。新年の儀式に出られる。太陽神のお墨付き

である。喜ばないわけにはいかない。

「崩れてしまった太陽神殿は……？」

「すべてが終わった時に私が力を貸そう」

もう断る理由など見つかるわけがなかった。こうして私は二神と共にエク・アカバルを倒し、尾を取り返す冒険へと足を踏み出すことになったのだった。

生きて穴から出てきた私に父は驚いたが、続いてコルイックとカニールが出てくると、何を誤解したのか絶望的な表情を浮かべた。コルイックは神官や一般人がわらわらと動き回っている景色に眉をひそめた。

「なぜこんなに人が出歩いている。『不吉な五日間』だということを知っているのか？」

「神様がこちらにいらっしゃると聞いて、そのお姿を拝みたいと沢山集まってきているのです」

父がおずおずと言うと、コルイックは短く鋭い息を吐いた。

「何が起きているかも知らず、暢気なものだな！すぐに家に帰し、じっとさせておけ。神官もだ！」

いまいまいげに指示を出す。続いて彼は、私が二神と共にエク・アカバル退治に向かうことを簡潔に説明した。父は嬉しそうにそれを受け入れた。

「もちろん、どうぞ使ってください。他にはどうですか？身軽で屈強な武人ならば沢山おりますが」

コルイックは「いらぬ」と一言で切り捨てる。太陽神の前に立つと大神官の父は小さく見えた。するとカニールは「準備がある」といなくなり、コルイックは人間の姿を見られることに耐えられなくなったのか、足早に森の中へ入っていく。

「ええと、まあそういうわけだから、私行くね」

父が頷くのを確認し、私は急いでコルイックの後を追った。

人の声が届かないところまで進むと、カニールが立っていた。

「えっ！」

彼の後ろには、巨大なジャガーがこちらをうかがっていた。

「私たちは元から身体能力が高いため短い時間で遠くまで行くことができるが、君は違う。私のものだが、これで少しは素早く進めるようになるだろう」

私はそばに寄ってきたジャガーの背中に飛び乗った。さすが神の所有するジャガーといおうか、野生動物とは思えないほど大人しい。つい頭をなでると不機嫌そうに低く唸られ、悲鳴をあげてしまった。

その時、ヒスイの短剣を手渡される。

「何もないよりましだ。我も力を取り戻すまでは武器で戦わなければならない」

コルイックは揺らめく炎のような形の刃の黄金の剣を持っていた。

「エク・アカバルと奴の吸血蝙蝠に特有の血の臭いを追っていく。昨日のものなら、まだ残っているはずだ」

そう言うと、コルイックはすすると木に昇って行った。飛べないため、木と木の間を飛び移って移動し、必死に臭いを探している。

「……カニール神は、何か特別な能力をお持ちで？」

「ああ……戦闘には向かないけどね」

そのうちに何か分かったのか、嬉しそうにコルイックが降りてくる。

「かすかだが血の臭いがする。こっちだ」

それだけ言うと、コルイックは走り出した。うっそうと茂る木々をうまくよけて進んでいく。

「よし、行くか」

カニールが同じように走り出すと、慌てる暇もなく私の乗っているジャガーが動き始めた。しっかりしがみついていないと振り落とされてしまう。

途中で何度か臭いを確かめながら、森の中を走って行く。奥に行くにつれ、森はどんどん入り組んでくる。感覚で走るコルイックに必死に付いていかないと、すぐに道に迷ってしまう。

「コルイック、少し早すぎる！ジャガーが疲れて付いていけなくなっているぞ」

カニールが叫ぶ。道理で動きがのろくなっていると思った。どれほどの距離を、どれほど長い時間走っていたのだろうか。

コルイックはドタドタと戻ってくると、落ち着かなさそうに辺りを歩き回った。臭いが消えてしまう前に行けるところまで行ってしまいたいのだろう。

「少し行ったところから臭いが強くなっていた。近くにいるのかもしれない」

どうしてもコルイックが落ち着かないので、ジャガーを置いて皆で見に行くことにした。すると少し進んだあたりで本当に私にも分るほどの血の臭いがした。

「うう……臭いが強すぎるな」

嗅覚が人よりも優れているのか、二神は口と鼻を手で覆った。エク・アカバルがいる可能性を考え慎重に進んでいく。コルイックが近くの草むらをかき分けた。

「——！」

木々の無い開けた場所があり、そこには蝙蝠の死体がうずたかく積まれていた。

「血の臭いはこれか……？」

「これは、集落の入り口のようだな」

カニールが蝙蝠の山の後ろを指差した。ボロボロに朽ちた木の門のようなものが二つ並んでいる。

「ケツアル、ジャガーのところまで戻っておけ」

そう言うと、二神は集落の中に入って行った。

私は元のところに戻り、ジャガーの隣に座り込んだ。エク・アカバルは私たちが血の臭いをたどってくると踏んで、わざと大量の蝙蝠を殺したのだろうか。あの集落の人たちは皆殺しにされたのかもしれない、と思った。

そこで私は気がついた。私がエク・アカバルならどうするか。話を聞く限り、奴はコルイッ

クに恨みを持っていると考えるのが妥当だろう。なんせ一回焼かれたのだ。

「あ……」

もしかして集落の中に奴がいるのではないか。不意打ちで復讐をするために。私は短剣を手
に立ち上がった。すると、ゾゾゾゾゾゾと不気味な音がした。すでに襲われているのかも
しれない。一歩足を踏み出した瞬間、奥から大量の蝙蝠が現れた。あっという間に目の前を
覆い隠した蝙蝠たちは、一斉に襲い掛かってきた。血を吸われたら終わりだ。私は慣れない
剣を必死に振り回し、蝙蝠たちを斬っていった。

「ケツアル！大丈夫か！」

あらわれた人影がエク・アカバルだと思い、剣を投げたところカニールだった。彼は素早く
よけ、木に刺さったそれを抜き取って私によこした。

「す、すみません！」

神に刃を向けるなど、呪われてもおかしくないことだ。しかしカニールは笑って大丈夫だと
返す。

「それにしても、この数の蝙蝠を一人で退治したのか？どこか噛まれているところは？」
そう問われて体中を調べてみたが、なぜか傷一つ付いていなかった。カニールの顔から笑顔
が消える。

「なぜだ……？」

「何をしている」

コルイックが帰ってきた。

「集落の人間たちは皆、血を抜かれた状態で死んでいた。そして、お前を襲った蝙蝠はあそ
こに積まれていたやつらだ。どうやら死んでいたのではなく、休んでいただけらしい」
先ほどのカニールの反応に、私は少し動揺していた。偶然かもしれないが、なぜ傷一つつか
なかったのだろう。

蝙蝠の襲撃で、今まで以上に慎重に進むことになった。しかし、そうこうしているうちに
夜になり、雨が降ってきたため臭いが消え、これ以上の搜索は不可能となった。

「くそっ！なんということだ」

カニールが即席で作った草の屋根の下で雨がやむのを待つことになった。時間が刻一刻と
過ぎていき、コルイックが焦りを感じているのが分かった。私はしばらく、昼間に使ったヒ
スイの剣についた血をこそげ落とす作業に集中する。

「カニール神。トウモロコシの神であるあなたにとって、雨は力の源になるのではないで
すか？」

雰囲気を変えようと尋ねると、カニールは笑って否定した。

「私は神だが、姿と性質とは人間だ。雨に打たれると体を壊す」

「えっ。あなたも本来の姿というものをもちではないのですか？」

するとカニールではなくコルイックが口をはさんだ。

「位が高いと動物の姿に、低いと人間の姿になる。エク・アカバルの本来の姿は大蝙蝠なの

だが、おそらく動きやすいという理由で人間になっている」

そこでコルイックは短く息を吐いた。

「あまり神のことを詮索するな。好奇心はいつか身を滅ぼす」

そういつて何も話さなくなってしまう。機嫌を損ねたのではないかと不安になりカニールを見ると、彼は「心配するな」と言った。

「コルイックも不安なのだよ」

翌日の朝、起きると二神はいなかった。上のほうで声がするので、手掛かりを探しているのか。私はジャガーにもたれかかり、戻ってくるのを待った。やがて、コルイックが近くの木からするすると降りてきた。

「目が覚めたか、少し来てみろ」

それだけ言うと、また登って行く。私は残念ながら木登りは不得手のため、一番低い枝をつかむことができない。立ち往生していると、見かねたのかジャガーが木の幹に体をつける。

「乗れ」ということなのか。恐る恐る片足を乗せても何も反応しない。

「ありがとう」

枝に手が届いてから必死に登り、木の上に出ることができた。昨日雨だったからか、空はとも曇っている。

「何ですか？」

「あれを見ろ。少し遠くなってしまったが」

コルイックが指差した先の空には、風に吹かれて流れる灰色の雲。

「よく見ろ」

目を凝らしてみると、一つの雲がほかのものより黒い。それは小さいものが集まって構成されているように見えた。

「あれ、もしかして蝙蝠ですか？」

「そうだ。またどこかの村を襲って、帰るところかもしれない」

罨に嵌ったばかりではあるが、手掛かりを一つでも見つけたら動き出さないと、奴は取り返しつかない悪事を働くかもしれない。私たちはすぐに準備を済ませると、木々の間から見える蝙蝠雲を追った。

半日ほど走っていると、不意に蝙蝠たちが降下し始めた。

「あそこか」

コルイックは気付かれないよう少し速度を緩める。やがて私たちは、蝙蝠が消えた所へとたどり着いた。高くそびえたつ山のふもとに、ぽっかりと大きな洞窟があった。中からかすかに蝙蝠の鳴き声が響いて聞こえてくる。この奥にエク・アカバルがいるのかもしれない。私達は慎重に足を踏み入れた。蝙蝠達はずっと奥の方にいるようで、入口の辺りには何もいなかった。静けさの中、私たちの足音だけが聞こえる。

「どこまで続いているんだ」

進んでも進んでも、蝙蝠たちの声は近づいては来ない。

「まさか、また罠か？」

不安になって来たころ、突然足場が消え、私たちは落下した。急すぎて悲鳴も出ない。地面に落ちる衝撃に耐えようと受け身の態勢をとるが、実際に落下したのはジャガーの毛皮の上だった。コルイックは、飛べるカニールに手伝ってもらい無事に着地する。蝙蝠の激しい鳴き声が聞こえたので辺りを見回すと、穴の側面いっぱい蝙蝠が張り付いているのが見えた。とっさに剣を構えるが、襲ってくる気配はない。

「エク・アカバル！ どこだ、出て来い！」

コルイックが叫ぶ。すると、壁の一部が蝙蝠の羽音とともに大きく動く。張り付いていた蝙蝠たちがいっせいに飛び立ち、そのあとから人影がゆらりとあらわれた。揺らめく影のような黒い衣をまとい、血のように赤い眼を光らせながら、エク・アカバルがこちらに近づいてくる。手にはコルイックの尻尾と思われるうねうねと動く生々しいものが握られていた。どす黒く染まっており、元は何色だったのか見当もつかない。

「久しぶりだな、コルイック」

奴—エク・アカバルがニヤリと笑った。

「……どうやって復活したのかは知らんが、すぐに焼きつくしてやる」

コルイックが黄金の剣を手的一步前に出る。

その瞬間、二神の姿が揺らめいた。エク・アカバルが尾を軽く振ると、コルイックがあっという間に吹き飛んだ。

「コルイック！」

慌てて駆け寄ろうとすると、「来るな！」と叫ばれる。エク・アカバルはケタケタと大声をあげて笑った。

「力の差がはっきりとしたな！ 今、俺はあんたの尾を手になっている。しかも今日はまだ『不吉な五日間』の最中だぜ。弱くなったお前が勝てるわけがないだろう？」

そういうと、奴はカニールと私を見た。

「どんな強者を仲間にしたかと思えば、トウモロコシの神と、そちらは単なる人間に見えるが？」

カニールは怒りからか拳を握り締める。私は、コルイックがいとも簡単にやられてしまったことが悔しく、ヒスイの剣を手にもって奴に向かって走って行った。

「ケツアル！ 無駄だ！」

カニールの声を見無視し、懐に向かって剣を突き立てた……と思ったが、かすただけだったようだ。驚いた表情のエク・アカバルが手を挙げるのを見るや否や、私は遅まきながら恐怖を感じ、弾き飛ばされる前にカニールのところまで逃げる。今までたっていたところに黒いものが突き刺さるのが見えた。

「なんだその女は！ 俺をよけるだと！？」

かすったところを押さえながら奴が叫ぶ。カニールが恐ろしいものを見るような目で私を見つめた。その隙にコルイックが立ち上がり、苦しそうに言った。

「く……。お前たち、いったん引け！『あの者』のところへ向かうのだ！」

「あの者」の意味は、カニールには伝わっていたらしい。

「行くぞ、ケツアル！」

と、穴の外へ昇っていく。私は慌ててジャガーに乗った。コルイックが遠ざかっていく。

外はすでに暗くなっていた。

「コルイック神を置いてきて平気なのですか！あのままでは完全に不利です！」

私がカニール神に言うと、彼は

「彼の言うことだから信用しなさい。不利な勝負はしないさ」

とだけ返した。私はその自信ありげな言葉に口をつぐむ。

「…『あの者』とは誰のことなのですか？」

新たな疑問を口にする。

「神に近いが、神ではない者。しかし一部の点では神以上の力を持つ者」

そこでカニールは言葉を切った。私の耳に口を近づけ、声をひそめる。

「『不吉な五日間を司る者』だ」



コルイックは再び素早い動きでエク・アカバルに向かっていく。エク・アカバルはそれを一瞥すると、尾をもったほうの手で軽く押し返す動作をした。太陽神の体が壁に叩きつけられる。

「無駄だ。今のお前はただの人間にすぎない。自分の力にやられるというのはどういう気持ちだ？」

そして彼は崩れ落ちたコルイックのそばへと近づいた。

「お前に焼かれて、俺は再起不能な状態となった。あれから何万年もたつが、変わらん」
エク・アカバルの赤い眼が鋭くなる。

「お前、生贄の儀式なんてものを、まだ行わせているのか」

コルイックは何も言わず、エク・アカバルをにらみつけた。

「実に下らん。残酷な行為だ」

—その昔、エク・アカバルとコルイックは生贄制度に対し、度々論争を繰り広げてきた。コルイックは「恵みのある生活の代償として当然」、エク・アカバルは「恵みに対して人の命は釣り合うものではない」と主張した。当時天界ではコルイック派が占めていたため、エク・アカバルは異端とされ、夜の神として追いやられた。その時から彼は、生贄の儀式を執り行っている人間たちを襲うようになった。やがてその行為はゆきすぎと判断され、太陽神によって焼き尽くされた。

コルイックは立ち上がるとエク・アカバルを睨みつけた。

「生贄は当然の行為だという意見を曲げるつもりはない。彼らは我々神が力を結集して与えた恵みをただ掘り返し、また刈り取ることのみによって簡単に手に入れる。代償が人の命というのも少なすぎるぐらいだ」

エク・アカバルは手を挙げた。コルイックがとっさに身構える。

「自分の考えが全て正しいと考えている者は幸せだな！」

吐き捨てるようにそう言うと、尾をつかんでいない方の手でコルイックの胸倉をつかむ。

「お前のような奴はどうせ人間たちが喜んで命を差し出しているというのだろうか？自分たちが洗脳しているようなものだということに。俺は、そんな汚れた奴が汚れた世界を治めていることに我慢が出来ない。だから力を手に入れる。俺が世界を作りなおすのだ！」

ボゴッと鈍い音がしてコルイックがまた壁に叩きつけられる。

中身は神であるので死ぬことはないが、人間としての体はずでにボロボロだった。このままでは動けなくなってしまうだろう。うめくコルイックを見て、エク・アカバルはフンと鼻を鳴らした。しかし、もうだめかとコルイックが覚悟を決めると、大量の蝙蝠の羽ばたきが徐々に遠ざかっていくのが聞こえた。エク・アカバルは蝙蝠を従え、洞窟の外へ出て行った。コルイックは立ち上がろうとして力が入らず倒れこみ、遠のいていく羽音を聞きながらゆっくりと目を閉じた。



司る者は天界にいる、ということで、私達は空へと昇った。やがて灰色に染まった雲を抜けると、日の光が弱々しく射す青空へと出た。目印のようなものはないが、カニールには場所が分かっているらしい。

「司る者を頼るのは最後の手段のはずだった。まさかここまで事態が深刻になるとはな」やがて、雲を突き抜けてそびえ立つ尖った岩が見えた。どうやらその中にいるらしい。カニールは入り口に立つと中に声をかけた。すると背の曲がった老婆が現れる。

「お前、確かカニール、といったか？」

「ああ。コルイック神の使いで来た。単刀直入に言うが、『不吉な五日間』を特別に早めてもらいたい」

すると老婆は穏やかな様子で首をふった。

「それは無理だ。私がどれほどの力を使っていると思っている。常に襲ってくる『不吉』を一年のうちたった五日間にとどめているのだぞ。命を削る行為さ。そんなに簡単に縮めることはできない」

「なっ！」

予想外の反応に私達は絶句した。老婆は続ける。

「それに、エク・アカバルのことはここまで伝わっている。力を増しているのだろう。コルイックがいくら太陽神でも、敵いそうにない。もう覚悟を決める時なのかもしれないな」途端にカニールが顔を真っ赤にして彼女に詰め寄った。

「何を言っている！ コルイック神が尾を取り返せば負けないものはない！ 弱気になるな！」

老婆はため息をつくとき、今まで気にも留めていなかった私を見た。

「お前は人間か？なぜこのようなところにいる」

「この者はケツアル。王国の大神官の娘で、コルイックが尾を取り戻す手伝いをしている」カニールが説明するが、老婆はあまり興味がなさそうだ。

「いくら大神官の娘でも、人間が手伝ってどうにかなるという問題ではないぞ」

あまりにも非協力的な態度に、カニールはいらだたしげにため息をついた。

「頼む。エク・アカバルが危険だと分かっているのならば、力を貸してくれ。奴が支配する世界を想像してみろ。黙って引き受けてくれないか」

懇願するような口調に老婆は困ったような表情を浮かべると、奥の部屋へ行った。やがて戻ってきた彼女は空の瓶を抱えていた。

「この中には聖水が入っていた。一年間『不吉な五日間』までの間、世界を守護するために少しずつ飲んでいたものだ。これがあれば、一日ぐらい日を早めることなど簡単なこと。しかし既に空だ。諦めてくれないか？」

カニールは悔しそうに口をつぐむ。老婆は瓶を机に置くと、同情の眼で彼を見た。

「あの……」

話しかけにくい雰囲気の中、私は声を出した。二人が煩わしそうに顔を上げる。

「聖水、作り直したらいいのでは？」

すると老婆が鼻で笑う。

「聖水の作り方を教えてやろう。まず数種類の薬草を溶かす。次に、強力な神の力を加える。—コルイック神が一番望ましいな—そして数か月発酵させる。分かったか？強力な神の力も発酵させる時間も無いということを」

馬鹿にされたような口調で言われ、私もカニールと同じく口をつぐむ。すると、カニールが立ち上がり、瓶をひったくった。

「何をするつもりだ？」

彼が手を握りしめ、しばらく力を込めた後に開くと、なんと何かの植物が手の中に現れた。どうやら彼は聖水を作ろうとしているらしい。確かに彼なら神の力を持っている。しかし私が見たのは、手から草を出したことだけ。強力な力が備わっているとは到底思えなかった。それに肝心の発酵時間はどうしようもない。カニールは手の中で草を溶かすと、瓶の中に入れた。そして瓶の口に自分の口を近づけると、何か言葉をつぶやく。「神の力を加えて」いるのだろうか。必死な様子の彼に、老婆も付き合っとうと思っただのか何も言わない。

「これでどうだ」

老婆は飲む前に首を横に振る。

「くそっ！」

カニールは乱暴に瓶を私によこした。

「もう打つ手はないのか……」

落胆するカニールを見ていることができず、私はうつむいた。すると、瓶の様子が変わってきていることに気づいた。先ほどまで緑色のどろどろとした液体だったものが、今は光を放っている。

「カニール神、これ！」

カニール達は瓶を見て目を丸くした。そしてだんだん光の強さを増していく瓶をゆっくりと受け取る。

「なぜだ？私ごときの力で。発酵まで完璧にできている」

奇跡が起きたという説明ではやや無理があるが、聖水は完璧に出来上がっていた。司る者がじっと私を見つめる。

「とにかく、これを飲んで早く日にちを早めてくれ！」

カニールが老婆に聖水を押し付ける。彼女はいまひとつ納得がいかない様子ではあったが、一気に半分ほど飲みほした。途端にあたりには風が巻き起こる。しかし家の中の物は飛び散ることはない。老婆は風を中心に歌うように何かを唱えだした。儀式のときによく唱えられているものと少し似ていた。

老婆は歌い終わると、笑いながら手を広げた。

「なんてことだ！今まで使ったどの聖水よりも強力だ！安心しろ、もう『不吉な五日間』は完全に終わった。今は本来三日目の夜だ。新年まであと二日。どうにかしてエク・アカバルを倒せ」

すっかり元気になったようだ。

「感謝する」

カニールがうれしそうに言う。すると老婆は彼を手招きすると、小声で何か言った。カニールは驚愕の表情を浮かべ、半分残った聖水を手に取った。

「では、私達は行く。本当に感謝する！」

私達は司る者の家を出て洞窟へと急いだ。

到着すると、私達はコルイックの元へ走る。しかし、縦穴のそばまで来ても、蝙蝠の鳴き声や羽ばたき、エク・アクバルとコルイックがやり取りしている音、何一つとして聞こえなかった。私は嫌な想像をしてしまい、とっさに頭をふった。縦穴を降りるとコルイックが横たわっているのが見えた。

「コルイック！大丈夫ですか？」

慌てて駆け寄ると、カニールは聖水を彼の口に流し込む。しばらくすると、彼はゆっくりと目を開けた。

「……奴は逃げた。今頃、他の集落を襲っているのかもしれない。今からなら更なる被害は避けられるかもしれない。行こう」

『不吉な五日間』では無くなったからか、コルイックは元気を取り返したようだ。私達はエク・アクバルを捜すために、夜の闇の中に飛び出した。



穴の中でエク・アクバルは空を見上げた。

「明日の朝すぐに襲撃する。一番大きなところを潰せば、他がやりやすくなるからな」

その声に答えるかのように蝙蝠たちが羽ばたきをした。握っている尾が黒さを失っている

ことに、彼はまだ気づいてはいなかった。



四日目の朝がやってきた。結局夜の間に奴を見つけることはできず、私達は焦りを感じていた。

「どうですか？近くの集落は全て探しましたよ」

コルイックに尋ねると、彼は遠くの方を見つめており、何も答えてくれなかった。

「何か見えたのですか？」

彼と同じ方向を見ると、黒い柱のようなものが見えた。私は瞬時にそれが何か悟った。大量の蝙蝠が竜巻の態勢をとって飛んでいるのだ。そして私はもう一つのことを気付いてしまった。

「ちょっと待って下さい、あそこって」

「ああ。お前のいた国だ。ちょうど太陽神殿の跡地にいる」

コルイックの言葉に一気に冷や汗が出る。

「カニール神、こっちはです！行きましょう」

私達は急いでそこへ向かった。

近づいていくと、蝙蝠の羽ばたきが激しく聞こえてきた。と同時に、人々の叫び声が。

「ケツアル！お前は国民を避難させろ！終わったら戦いに加われ！」

コルイックの指示通りに人の多いところへ向かうと、私は事情を説明し、時には吠えるジャガーを使って人々を反対側の森へ誘導した。

「ケツアルっ。お前か？」

突然聞こえてきた声に振り返ると、そこには父がいた。すっかり憔悴した顔だ。

「父さん！早く逃げて。大丈夫、私達ならエク・アカバルを倒せるから！」

父は何か言いかけたがやめ、私にしっかり頷いてみせた。

「よし、行って来い。国民のことは私に任せろ」

私は小さく笑い、すぐに太陽神殿跡地へと向かった。

エク・アカバルの握る尾は、すでに黒さを失い、美しい緑色へと変わっていた。しかし力があることには変わりがないので、奴の力が弱まったといえども油断はできない。私は蝙蝠たちを斬りながらコルイックの元へ近づく。

「またお前か」

エク・アカバルが忌々しげに言う。私は震える手に剣を握り直した。

「お前にはもう昨日までの力はない。我々が三人がかりで攻撃すれば、勝てないものはない」

淡々とした言葉に、エク・アカバルは悔しそうに尾を見つめた。黄金の剣を構えたコルイックがカニールの手を借り、跳ねた。エク・アカバルは、とっさに蝙蝠を呼び寄せ壁を作る。コルイックはその壁をいとも簡単に破ったが、すぐにエク・アカバルの力に弾かれてしまった。とっさにカニールが受け止める。

「しよせん神の力を持たないお前は俺に勝てない！」

エク・アカバルが叫ぶ。少し余裕が失われているように感じた。奴は私を睨みつける。

「お前も、こんな自分の治める世界も守れぬような弱い神に自らを捧げようというのか？」
私は太陽神を侮辱されたことに対する怒りの感情がふつふつとこみあげてきた。

「コルイック神はお前なんかよりずっと素晴らしい神よ！私達はお前を倒す。そうして私は名誉ある生贄として喜んでこの身を捧げるの！」

「そうするように思い込まされているとも知らずにな！コルイックは汚れた神だ。愚かな小娘よ！」

私の怒りが頂点に達した。ジャガーに声をかけ、まっすぐエク・アカバルの元へ運ばせる。襲い来る蝙蝠を手当たり次第に斬り捨てて奴の目の前に来た瞬間、私はジャガーを踏み台にして飛んだ。短剣を持った手を振り上げると、奴の腕めがけて思い切り振りおろした。

「ぐあっ！」

うめき声に、腕を斬り落とせたことを確信する。落ちていく尾をつかむと、まっすぐコルイックへと投げた。

「よしっ！」

コルイックは嬉しそうに叫ぶとしっかり尾をつかんだ。

その瞬間、コルイックの姿が光に包まれた。辺りが真っ白に染まる。眩しすぎて目も開けられない。とてつもない気が放出されているのを感じた。次に激しい風が吹くような音がして、急激な熱波に襲われる。ようやく目を開くと、巨大な、炎に包まれた大トカゲの腹が見えた。大きすぎて全容が見えない。

「元の姿に戻った！」

カニールが叫ぶ。私は炎にやられないよう急いで離れた。コルイックは、その巨大な手をエク・アカバルへと近づけていく。エク・アカバルの周りの蝙蝠が次々に焼き尽くされていく。エク・アカバルはコルイックを見上げたまま、目を見開いて固まっている。やがてその手に包まれ姿が見えなくなった。コルイックは焼けただれたエク・アカバルを、あの「穴」へと投げ入れると、その上に巨大な岩を出現させた。するとカニールが手から草の蔓を出し、あっという間にその岩に巻きつける。コルイックはそのまま岩を穴の中へ落とした。するとその上に直方体の石が大量に現れ、みるみるうちに積みあがって行く。

「神殿が……」

しばらくすると、太陽神殿よりもずっと高さのある、美しい四角錐の神殿が出来上がった。神殿が出来上がると同時にコルイックの姿が小さくなり、人間の姿へと変わった。

「すごい……！」

私は今更ながら驚愕した。カニールが飛んでいくのを見て、私も慌ててコルイックの元へ向かった。

「ケツァル、感謝する。おかげで尾を取り返し、エク・アカバルを倒すことができた」

私は太陽神が微笑むのをはじめて見た。

「お褒めの言葉、ありがとうございます。私、これで生贄になれますね！」

その言葉に、コルイックとカニールが困ったように顔を見合わせた。

「その話だが、お前に伝えなければならないことがある」

そうしてコルイックの口から飛び出した言葉は、今まで聞いたどんなものよりも衝撃的だった。

「お前には、神の素質がある」

私はそれをすぐには理解できず、ゆっくりと咀嚼して、ようやく叫び声をあげた。

「ど、どういうことですか!？」

騒ぐ私に二神がゆっくりと説明をしてくれた。

素人にも関わらず、蝙蝠の襲撃に傷一つ負わなかった時にまず怪しいと思ったこと。

コルイックが近付くことさえできなかったエク・アカバルにかすり傷を与えた時、何らかの力があると分かったこと。一瞬、奴の手先が仲間を演じているのではないかと疑ったらしい。

そして聖水。あれは、それほど強力な力を持たないカニールが奇跡的に作れたのではなく、私が瓶を持ったから力を加えることができ、完成させられたということ。これはあの司る者が気付いて、カニールに教えたそうだ。

「お前には私よりももっと強力な神の力がある。よって我には、お前を神へと昇華させる義務が生じた。要するに、新年の儀式で、お前はただの生贄ではなく、神へとなる」

展開が早すぎて私はしばらく混乱していたが、二神の様子に信じざるを得ないことを悟った。私が神になるとは……。

いまひとつ実感がわかないまま一日はすぐにすぎ去り、あっという間に新年の朝がやってきた。私の父は、私が神になるということをコルイックから聞くと、失神しそうなほど驚き、そして喜んだ。私にとってとても名誉なことであり、世界を守る神がひとつ増えることはとても喜ばしいことであった。

そして儀式の時がやってきた。生き残った国民全員が、新しくできた神殿の周りに集まっている。薬草の匂いが立ちこめる中、神官たちの歌う言葉が流れた。大トカゲの姿に戻ったコルイックは神殿の上に浮かんでいた。

カニールは、今回の働きにより、この国の守護神としてこれからも見守っていくことになった。そして私の乗っていたジャガーも、今回私を手助けしたことから神へと昇格した。一回り大きくなったジャガーとカニールがコルイックの近くで私を見守っている。

私は神殿の階段を一段ずつ登っていった。髪が風になびき、そのまま真っ白な羽毛へと変わる。なんだか体が軽くなり、一気に階段を駆け上がると、手足が消滅し胴体が長く伸びて、あっという間に私は巨大な蛇となった。羽が体中を覆っていく。心地良い風を感じながら、私は神殿の上空を飛行した。見下ろすと、父が涙を流しながら笑い、手を叩いていた。私は勢い良く下降すると、父の前で止まる。

「……立派だ、ケツアル」

私はその言葉にひと鳴きすると、コルイックと共に大空へと羽ばたいた。

これから私は最高神のひとりとして生きていく。目の前に開かれている大きな世界に胸が

高まり、私はまた大きく羽ばたいた。